

(冷静に)

「あなた、生放送なんかやりながら私で散々遊んでいたのに、自分のことばかりだったじゃない」

「カメラに背中を向けながら私の上に乗っかってレイプして、生放送なんかしてる意味あったの？目の前にいる人間も第三者も雑に扱って、自己満足も甚だしいわね」

(少し戸惑いながら)

「へ？いや、なんでそんなに急に喋るの、って…別に、深い意味は、ないけど…」

(徐々に声が小さくなり)

「いや、ほんと、深い意味は…あんまりない…」

「あ、あんまりってのは…！その…」

（少し声を荒らげて）

「ああ、もう！もうこんなことになっちゃうなら全部言ってあげるわよ！」

（恥ずかしそうに）

「さっきまで、動けない状態で、ち、乳首とか、スカートの中とか、いじられて…、レイプまでされて、その…気持ちよかったの…」

「それに、顔も居場所もわからない人達に見られてるって考えたら…その…こ、興奮したの…」

「さ、さっき興奮してないって言ったのは…嘘、です…」

（少し声を荒らげて）

「し、仕方ないでしょ！こんなこと、あんな状態で口にしたくなんかなかったの…」

(恥ずかしそうに)

「でも、もう抑えられない…あなたがレイプしてる途中、溶けるくらい気持ちよくて…その…」

「あなたが、もっと欲しくなった…」

(懇願するように)

「だから…もう一回…もう一回、私にお仕置してよ…」

(恥ずかしそうに)

「理由なんかどうでもいいわよ、なにか適当に作ってくれば…」

(キョトンとして)

「え、人に見られて犯されたことを興奮した変態に対してのお仕置…？」

（照れながらも少し嬉しそうに）

「ふふ、あなたにしては頭の回った内容じゃない」

「それに…そのお仕置、すっごい興奮する…」

「あなたも大バカだけど、私も大概ね。こんなことで興奮しちゃうなんて…」

（囁くように）

「ねえ…ちゃんと、気持ちよくしてね？ちゃんと、イかせてね？あなたのおっきなおちんちん、私の中で熱くなってるね？」

「ふふ、いい子。好きよ、あなたのそういうところ」

（冷静になりながら）

「ほら、こっち来て、もう我慢させないで」

「何？床でやるわけないでしょ？制服のまま寝っ転がったら汚れちゃうし、そもそもカメラに入らないでしょ？」

（小さく呟くように）

「よいしょっと…あと、これも、よいしょっ…」

（冷静に）

「ほら、こうやって机を繋げて、その上に私が横になればいいでしょ？うん、ちゃんと画面に入ってるね」

「さてと…もう準備はできたわよ」

（囁くように）

「あなたの、コ・コ・も、準備完了みたいね…こんなに固くしちゃって、淫乱もいいところね…」

「私の下も、すごーい濡れちゃってる…私のココが、あなたのおちんちん、欲しがってるわよ…」

（欲しがりながら）

「早く…早く、私の中に入れて？私のこと、犯して？」

（恥ずかしそうにしながらも嬉しそうに）

「んっ…ふふ、強引ね…自分から押し倒しちゃうなんて、本当に変態…」

（小さく喘いで）

「あっ…んんっ…乳首っ、きもちい…摘まれたりっ…カリカリされるのっ…あっ…すっ…」

いきもちいい」

「もうっ、やばいっ…下、ぐちゅぐちゅっ…ねえっ、早くっ…早く入れてよお…」
「そうっ、あなたのおちんちん…ここに、入れてっ…」

(喘ぐように)

「んああ…！やあ…おちんちんで、クリ、いじらないでえ…！無理っ、無理い…焦らすなあ…バカバカっ…ああっ…」
「んっ…んんーっ…！んあっ…は、入った…」

(小さく呟くように)

「ねえ…入ったんだから…早く動かしてっ…？」
「ああっ…やだっ…そんなゆっくりじゃ…だめえ…」
「お願いっ…もつと、もつと激しくっ…激しくしてえ…」

(激しめに喘ぎ)

「あっ…！あああっ…！そう、そう…！それっ…それが、欲しかったのっ…！あああっ…」

「やだっ…止めないでっ…もっと、もっとちようだいっ…！止めないでえ…！」

「あっ、あっ…！ああっ…んんーっ！もうっ、やばっ…やばいっ…！い、いきそうっ…！
イッちゃう…！」

(喘ぎが少し小さくなり)

「んあっ…あなたもっ、いきそう…？ふふっ…そっか…あんっ…」

「じゃあっ…またっ…一緒にっ…イこ…？」

「ねえっ…抱きしめ、させてっ…？」

「んっ…あったかい…あなた、いい匂い…」

「ねえっ……イかせて…」

(激しく喘いで)

「あっ…あああっ…！んんっ…！はあ、はあっ…あああっ！」

「イク…！い、イツちゃうっ…！！」

「んんっ…！あっ…あっ、あっ…んあっ…！ああっ…！」

「熱っ…！熱いっ…！中、熱い…！あああっ…！」

(ぐったりしながらもビクビクして)

「はっ…はっ…はあっ…はあ、はあ…はあ…」

(疲れたように喘ぎ)

「い、イツた…しゅごく、イツちゃった…きもちよかったあ…はあ、はあ…」

(疲れたように)

「あなた、精子…出しすぎ…こんなに、出したら…やばいって…」
「んっ…はぁ…今回は、ゆっくり、抜いてくれるのねっ…ふふ…」

（途切れ途切れで）

「はぁ…やば…生放送っ…視聴人数…〇〇人だって…もう、学校なんか来てられないわね…
はぁ、はぁ…」

（我に返ると後悔するように）

「はぁぁ…何やってんだろう、私…こんな淫乱な真似して…」

（呆れたように）

「ねえ、もういいでしょ…何が、って、生放送よ。もう満足したでしょ？もう止める

わよ」

「よし、生放送終わり…はあ、あなたのバカに付き合っ
て、私までおかしくなっちゃっ
た…」

（少し楽しかったようで落胆はしておらず）

「でも、楽しかったし、すごく興奮したわ。あなたに、
変な性癖を見つけられちゃっ
たわね。ふふっ…」

（冷静に）

「あなただって、すごく楽しそうな顔してたわよ？自分では気づいてなかったと思っ
けど、息を荒らげて必死に腰動かして…まるで獣だったわ…」

「でも、別にいいわ。私もあなたも楽しかったなら、それでいいわよね」

（囁くように）

「ねえ、これで終わりにするなんて言わないわよね？ 今日だけで終わりだなんて、そんな馬鹿なこと言わないでよね？」

「これからも私に…お仕置、たくさんしてね？」